

薬史学会通信

No.18 1993年8月

113

東京都文京区本郷7-2-2
財学会誌刊行センター内
日本薬史学会事務局

第53回FIP(国際薬学連合)'93東京 薬史学シンポジウム開催のお知らせ

と き 1993(平成5)年9月9日(木) 14:00

ところ 京王プラザホテル(東京都新宿区)

従来、FIP開催期間中にその特別シンポジウムとして国際薬史部会が開催されてきたが、今回FIP'93東京を機会にスウェーデン薬史学会M.ヘルデリウス会長の司会で9月9日、京王プラザホテルで開催されることになった。

FIP'90イスタンブール、'91ワシントン、'92リヨンでの薬史学シンポジウムに日本からの参加者がなかったので、今回の東京での開催に当たって、M.ヘルデリウス会長から、同シンポジウムへの日本の参加を日本薬剤師会高木敬次郎会長を通じて強く要請された。

以上のような経過を経て、日本薬史学会から柴田承二会長および岩井鉦治郎評議員(内藤記念くすり博物館長)がシンポジウムに参加することになった。

特別シンポジウム(薬史学会)

1. 日本の医薬品史(ビデオ併映)
内藤記念くすり博物館長 岩井鉦治郎
2. 正倉院御物(薬物)の化学分析
日本薬史学会々長 柴田 承二
3. 郵便切手を通じて見た日本医薬史
アメリカ薬剤師会 G.グリフェンハーゲン
4. 歴史的経験を通してのヨーロッパの薬学の今後の展望と革新
バルセロナ大学薬学部教授 A.M.カルモナーコーネット
5. 350年前の軍艦VASA号に見る治療技術
スウェーデン・VASA博物館長 K.ヴィラー
6. ホワイト・ベア薬局300年史
スウェーデン薬史学会会長 M.ヘルデリウス
7. 史料としての処方薬袋(ポスター展示)
デンマーク薬剤師会 H.O.ロルドラップ
(原文英文:シンポジウム参加についての詳細は事務局にお問合せ下さい。)

日本薬史学会集談会

第2回ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅 報告会ご案内

と き 1993(平成5)年12月4日(土) 1:00より

ところ 東京理科大学記念講堂1号館(新宿区神楽坂1-3)

でんわ 03-3260-4271(但し当日は不通)

* JR・地下鉄 飯田橋駅下車

第2回 ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅 報告記

「第31回国際薬史学会議が5月3日～7日ハイデルベルグに於て開催された。わが薬史学会からは山田幹事が演題を出すとともに出席参加を希望する会員もあったので、第2回の旅はこの時期にドイツの医薬史蹟を訪ねた。参加会員の分担執筆した印象記を掲載する。

日 程

- 5月5日(水) 成田発 フランクフルト着
- 5月6日(木) ダルムシュタットのE.メルク社博物館、工科大学のケキュレ記念室を見学
- 5月7日(金) ハイデルベルグの国際薬史学会議と薬事博物館見学
- 5月8日(土) ゴーセンのリービヒ博物館見学とライン川下り
- 5月9日(日) ヴュルツブルクからローテンブルクへ移動
- 5月10日(月) ローテンブルクよりインゴルシュタットのドイツ医学博物館を見学してミュンヘンのドイツ博物館を見学
- 5月11日(火) 自由行動
- 5月12日(水) ミュンヘン発フランクフルト経由帰国の途に
- 5月13日(木) 成田着解散

国際薬史学会議出席の3名は開会式に間に合うよう5月3日に先発した。

第31回国際薬史会議に参加して

山田 光男

5月3日から7日までハイデルベルグ市で開催されたXXXI International Gesellschaft für Geschichte der Pharmazieに参加し、最終日に「Start and Transition of Japanese Pharmacopoeia in 1886～1991」の演題名で口演した。同会議の公用語は、国際会議らしく英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語の5ヶ国語が掲げられていたので、英文で演題、講

演要旨を申込み、当日は英文スライドを用いて発表し、質問が1つあった。

開会式(5月4日)夜、ハイデルベルグ城内のDeutsche-Apotheken-Museumで開催された懇親会で、D. A. W. Koning博士から「日本の清水藤太郎を知っているが、貴方はそれ以来初めての日本からの参加者である」と言われた。同懇親会で、多数の参加者が賑やかに交歓しあっているのを目の当りにして、ヨーロッパ各国薬史学会の伝統と層の厚さを強く認識させられ、日本からも将来積極的に当会議に参加する必要があると思われた。

今回の同国際会議は、1995年9月25日から29日までフランス・パリ市で開催の予定で、公告によれば主トピックは、Pharmacy in Hospitalおよび組織の歴史、公定書と薬局方、病院内Drugs(麻薬?)となっている。当会員から多数の参加が望まれる次第である。

ハイデルベルクと国際学会

高橋 文

古城と戯曲でなじみ深いハイデルベルク市で、国際薬史学会が開催された。5月4日の開会式には250名ほどの出席者があった。配布資料によれば、今学会の登録者数は278名とあり、参加者はヨーロッパを中心にアメリカ、アフリカ、中近東、アジア等からである。

今回のテーマは、製薬企業、薬局、薬局方・医薬品集等、薬史関連写本と絵、薬局と芸術他に大別されており、大会場でのシンポジウムや口頭発表と並んでポスターセッション、小会場での討論を中心とした発表があり、発表毎に活発な発言が続いた。7日は山田光男先生が日本薬局方第一版成立の過程を中心にスライドを使って発表され、参加者の関心を惹いた。発表後に先生を囲んだ参加者の一人は、配布の講演要旨を手にして帰国したら薬史関連の皆さんに配ります、と英語で告げ

た。

開催地がドイツの故かドイツ語の発表が多く私にはお手上げであった。薬事博物館での Reception は、すし詰めの会場に各国語が入り交い、スウェーデンの友人は私のために独・仏語を英訳して各国の同学者の紹介に努めてくれたが、せめてもう一ヶ国語の研鑽の要を痛感した学会でもあった。

Deutsches Apotheken-Museum 拝見

寺澤 孝明

「Alte Apotheken」という書籍に、ドイツの薬学史と関係が深い180箇所の博物館が紹介されている。なかでも、ハイデルベルグ古城のDeutsches Apotheken-Museum が、もっとも内容が充実した施設のようなのだ。事実、欧米の薬学史の文献や写真集に、本館が所蔵する資料がよく紹介されている。

展示品では、華麗なシュワルツァハの修道院薬局の薬品棚や天秤、イッカク、テリアカ、人の頭蓋骨、Dreckapotheke の由来を示す珍品など近代に至るまで繁用された薬物、それに薬剤師のステータス・シンボルであったマジョリカ焼をはじめとする薬壺が、各時代の薬学的特徴を現わしていた。薬局の象徴であったゴシック式やバロック式の乳棒や乳鉢も整然と陳列され、当時の薬局がいかに繁栄していたかを物語っている。

期待通り、軟膏壺をもつ薬局の守護聖人マグダラのマリアと対面することができた。うす暗い室内に控え目に立つマリア像（1450年頃の彩色木像）は、写真で見た印象よりも小さく、おもわず薬師如来の小像を見ているような錯覚に陥った。軟膏壺をもつ聖女と薬壺を手にする薬師如来、薬物、そして信仰。この三者の図式は、比較民族学的にも興味深いテーマのようである。入口の聖コスマス・聖ダミアン兄弟（1750年頃の木像）にドイツを代表する薬事博物館の再訪を約束して退館した。

E. Merck 社の博物館訪問記

大橋 清信

フランクフルトから南へオートバーンを車で1時間足らず、ヘッセン伯州領の古都ダルムシュタットのE.メルク社に着く。門内直ぐの四層の建物が、博物館である。先ず古文書係のシュッツ博士から、18世紀末刊行のファルマコペイア・ウィルテンベルギカをはじめ所蔵の古文書のお話を聞き、前夜食事を共にしたゲッツ博士のご配慮で、バスに乗って工場構内を参観。工場敷地は広さ1km四方に及び、従業員は8千人余。因みにダルムシュタットの人口は約13万である。博物館1階には、1654年のエンゲル薬局の創立以来、1827年のE.メルク即ちエマヌエル・メルク（1794～1855）によるアルカロイドの生産開始、また1888年の試薬事業の開始など、二度の大戦の試練を超えての今日までの会社の歩みを50枚近くのパネルで展示し、改めて1925年以後は、アメリカのメルク社とは全く別会社であることを知った。昼食後、『Modern aus Tradition』と題した本を頂き、3世紀半の伝統の重みを感じながら、一層の繁栄を祈念して辞去したことであった。

Kekulé 記念室

末廣 雅也

古くよりヘッセン方伯国の主都として発展して来たダルムシュタットはリービヒ、ケキュレ、フォルハルト、アンシュッツ、シュトレッカーと19世紀に活躍した化学者が生まれたことで興味深い。1836年創立という工科大学（Technische Hochschule）は緑の木立ちに囲まれたキャンパスの中にゆったりと建った近代的なビルに化学教室があった。

玄関を入ると先ず目につくのは床のタイルがベンゼン環にちなんだ六角形の模様であり、階段教室の大講堂もKekule Auditoriumと名づけられた六角形である。講堂と廊下をへだてた一室が、Kekule Sammlung すなわち記念室である。ここは一般には公開されていないのでギーゼンのリー

ビツヒ博物館のようにガイドブックのようなものではなく、管理者のPriebe夫人より丁寧な説明を受けながら見学した。

記念室にはケキュレの後任としてボン大学の教授を勤めたアンシュッツが退職後、故郷に戻ってケキュレの伝記2巻を執筆するとともに遺品を蒐集したものが収蔵、陳列されている。壁には晩年の肖像画（両親のと合わせて）が掲げてあり、机上には彼自筆のノート、ベンゼン核の模式図の写真（オリジナル）、功績により授けられた爵位記とシールと、最も興味を惹いたのは60才の誕生祝賀に集った化学者のサイン（薬史学雑誌Vol. 29 No. 1のグラビア頁参照）とアルバムであった。

夢にあらわれたベンゼンの環状構造を思いつかせたという“蛇”の文鎮と、30才台の探求心旺盛なケキュレを画き出したカリカチュアも印象深いものであった。

リービツヒ博物館を訪ねて

山川 浩司

ギーゼンのリービツヒ博物館を訪ねることは、有機化学を専攻する私にとって永年の夢であった。5月8日朝フランクフルトのホテルを出発、北へ一路ギーゼン市を目指してアウトバーンを飛ばし約1時間で静かなギーゼン市内に入る。リービツヒ通りに永年絵から脳裏に焼き付いているリービツヒの化学実験室の建物が目に入った。思わず足早になっていた。

リービツヒが1824年21才でギーゼン大学に教授として赴任し、近代化学実験室を建設して多くの有機化学者を育成した。建物は第二次世界大戦で焼失1952年に再建されたものである。

博物館は全部で12室よりなる。建物の天井は思っていたより高く、古い日本の化学実験室より防火の配慮がされている。入口の隣のリービツヒの個人研究室は、現在博物館の事務室となっている。一番奥の講堂でリービツヒのVTRを見た。元素分析室には5連球の装置、天秤室、10名程が実験している絵で知られている化学実験室、リービツヒ冷却器は上の水溜めから流すように工夫されて

いる。入り口の横にホフマンのレリーフがあり、一番弟子であったことを偲ばせる。リービツヒ博物館での1時間余りは、私にとっては夢の時間であった。

夢の国、ローテンブルク

川淵美奈子

飛行機の窓から広がる赤い屋根。私が異国の地で初めて目にした景色である。それから6年経った今年5月、ドイツは変わることなく、赤い屋根の立ち並ぶ田園風景が私を迎えてくれた。ドイツが大好きな私にとって、今回のツアーは念願のハイデルベルグ薬学博物館見学も含め、願ってもみない行程であった。

ローテンブルクといえば、いわずと知れたドイツ観光旅行の目玉、ロマンチック街道の主要都市である。市壁に一步足を踏み入れると、そこは中世のおとぎの国。そこだけ時間の流れが止まってしまったような、本当に可愛らしい町である。さて、このローテンブルクを訪れたのは、5月9日の日曜日、母の日であった。町はずれの草むらで数人の男の子が寝そべっているのに出くわした。何をしているのかと思えば、一番年上の少年は、クローバーで首飾りを編んでいるのである。喧嘩をすれば強そうな、図体の大きい少年が、である。他の子たちがお菓子を取り合中、彼は無言で作っていた。お母さんへのプレゼントであろうか…。夢の国の、心暖まる一時であった。

最後になりましたが、今回のツアーでいろいろご教示頂いた諸先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。

ドイツの薬局 (Apotheke) の印象

宮本 法子

「ロマンチック街道」から少し離れたところのインゴルシュタットの町。街路樹の向こう側に、くっきりと、あざやかに赤色のドイツ文字Aが見える。このAの中には、聖杯と蛇が白色で描かれている。おなじみのドイツの薬局サインであるが、こんなシンプルなサインが町中であって実に目立

つ。これはドイツ薬剤師連合が、薬剤師の連帯の証しとして決めた統一サインであり、1929年にある雑誌が公募したのが始まりで、その後、十数回も変えられたという。

この町の広場には3軒の薬局があった。ドイツの薬局は平均1~2万種類の医薬品をもつといわれるが、美観を大切にしているドイツ人らしく、医薬品は整然と陳列され、雑貨はもちろんのこと広告も見られず、薬局全体の色調も落ち着いたものであった。また、客の出入りが激しいにもかかわらず、どの薬局も薬剤師が親切に対応してくれ、居心地がよく、立ち去りがたい気持ちにするのだった。Post Apotekeの正面玄関には、「夜間休日表示板」があった。これは薬剤師会が自主的に、休日や夜間に薬局を開いている当番カレンダーである。

今回、私が足早に訪れた薬局は7軒であったが、どの薬局でも感じた「居心地のよさ」は、一体どこからくるのか、今も時々考える。

中世の町、ローテンブルグで

小倉 豊

カスタニエン（マロニエ）の花が咲きほころぶ5月のドイツは、万物に生気がよみがえり一年で一番美しい季節だという。

昨年イギリス、フランスの見学では、ヨーロッパの病院の歴史が教会や修道院にはじまり、そこでの医療行為が宗教活動そのものであったことを知ることができた。今回、ドイツでは、さらに中世都市におけるシュピタルという病院の原型をみることができ、また、初期の薬局モデルのいくつかを薬学博物館で目にすることが出来た。

ドイツでは、中世に独立国のような経済力をもった自由都市が栄え、今なお、見事な城壁をもった城郭都市があちこちに残っている。この中世の城郭都市にはシュピタルと呼ばれる病院があって、市民のための病院、仮宿泊所、老人ホームであり、行き倒れの旅人のための救護施設でもあった。今回訪れたローテンブルグのシュピタルも13世紀の建物で非常に規模も大きく、昔のままに

保存されているので興味深いものがあった。広い敷地の中に11棟の建物があり、13世紀末にできたゴシック式の聖霊教会、ペストなどの伝染病患者を収容した隔離病棟、16世紀にできた調理場などがある。全部は見れなかったが、現在はユースホステルなど公共の施設に活用されているものもあるようである。

シュピタルの運営は町の有力者による寄附や献金を財源に教会の手で行なわれていた。中世における病院とは生活の困窮者が心安らかに天国に行くための施設であり、治療よりも世話をすることに重点がおかれ、キリストの教えを実践するための慈善施設であったと考えるほうがよいようである。ハイデルベルグの薬物博物館でみた修道院薬局のモデル、薬壺をもったマリア像や薬草をもったキリストの油絵をおもい出しながら、この中世のシュピタルにおける薬というのは、何がどんな風に使われていたのか、どの程度の役割を果していたのか興味のあるところである。

ビュルツブルグの印象

斎藤 明美

ロマンチック街道の起点として知られるビュルツブルグを訪れたのは、5月9日であった。日曜日の朝、人通りもまばらなこの街には、静けさとまばゆいばかりの新緑が目映った。

最初に訪問したレントゲンの家は残念ながら休館日であったが、15年間居住した重厚なたたずまいをみせてくれる建造物であった。また、この地でX線を発見したこともよく知られる。

日本でもおなじみの医師シーボルトの生誕の地であり、うっそうと繁る緑の中に佇立する彼の胸像はエンジェルたちに守られ威厳ある表情でどこか一点を見つめ、私達に何かを語りかけようとしているのであろうか……。

市の中心部にあるレジデンツはバロック風の荘厳な宮殿で「皇帝の間」など内部は華麗そのもので、壁画の立体的な表現には目をみはるばかりであった。

マイン川沿いの古都であり、中世のフランケン

文化の中心地ビュルツブルグは自然の美しさと薬化学が調和した風情を感じさせる街だった。

ドイツ医学史博物館

内藤記念くすり博物館 岩井鈺治郎

インゴルスタットのドイツ医学史博物館へ立ち寄る事になったのは、山田団長にメルクのゲッツ部長が、ローテンブルグからミュンヘンへ行く途中に、今回のツアーに相応しい素晴らしい博物館があるとアドバイスされたからである。ただし、そのミュンヘンへの移動日が月曜日で、博物館は休館だろうから植物園だけでもみられるかもしれないとの淡い期待をもって立ち寄った。

通用門から入られた山田先生が、急いで出て来られて、『日本からわざわざ来たのなら、1時間ぐらいなら開けてあげましょうといわれたので、早く入って見てください』といわれた。到着したときにたまたま博物館長がおられ、その好意によって、私どもは博物館も植物園も入ってみることができた。

中央解剖実習棟として使われていた二階建の建物が、博物館として利用されている。二階中央の解剖実演ホールであった所には、人体の全身模型や部分模型が置かれ、その天井にはフレスコ画が描かれて美しく修復されている。壁には、解剖にかんする歴史的な事が書かれていたように思う。一階や二階の他の場所には、ヨーロッパで使われた古い薬箱、手術道具、顕微鏡、聴診器などは勿論、中国の携帯用薬瓶、診断用人形や纏足などがびっしりと数多く展示されていた。

植物園は、アルカロイド含有植物をまとめて植栽するなど植物成分を中心とした展示がしてあった。背の高い説明書は、背の高い人が見るとき読みやすい。奥の一角には、目の不自由な人のために、点字花壇が作られていた。花壇全体が、膝の高さに作られ、植物に容易に触る事ができ、花壇の縁に点字で植物名が付けてある。全体としては小さく、種類も少なく、育成もよくないけれども、工夫のある面白い植物園であった。

帰ってから、末広先生の示唆をうけ、英文の「日

本のくすりの歴史」と内藤記念くすり博物館のパンフレットを送ったところ、できれば訪れたいといってくれた。私としては、交流の絆がむすばれた事に感謝している。

MunchenのDeutsches Museumを訪れて

井上 維子

今までにMunchenを2回訪れているが、“Deutsches Museumはイザール川の中洲にある世界最大の科学博物館で、総展示面積5.3万㎡、30の専門分野に分れ、科学技術の発展を示す1.6万点もの機械・工業製品が展示されており、見学コースの全長は17kmにも及ぶ”と聞いて、いつも見学を躊躇した。

今回の旅程では、5月11日がMunchenで終日自由行動となっていたので、一日ゆっくりとDeutschen Museumを見学することができた。

新技術誕生に貢献した偉大な科学者の業績を称える大理石の広間“Der Ehrensaal”，見学者が自ら操作できる物理・化学実験のデモンストレーション、通常建物の中に展示されるとは考えられない巨大な飛行機、蒸気機関車などの実物、さらに炭坑までも復元されていて驚きの連続であった。また歴史的薬局として、芸術作品のように華麗なRegensburgのSt. Emmeram Kloster Apotheke（1800年頃）が復元されており、そこにはドイツ各地の薬局から集められた超一級の備品・調度類が備え付けられ、当時のドイツにおける薬局の社会的地位の高さを伺い知ることができた。

科学技術の発展が人類にいかにか豊かな生活をもたらしたかを実感すると共に、ドイツ人魂に裏打ちされた徹底した計画・収集、完璧な展示に圧倒された一日であった。

かつて留学していたミュンヘンを訪れての印象

飯沼 宗和

今から8年前、ミュンヘン大学 Institut für Pharmazeutische Biologieで1年間半程研究す

る機会があった。此度、日本薬史学会が XXXI Congressus Internationalis Historiae Pharmaciae (Heiderberg) への参加、発表とドイツ薬史蹟を訪ねる旅を企画していることを知り、同学会の雰囲気を楽しむ、また東西融合後のドイツ変革を垣間見たい気持で参加した。旅行したルートがドイツ南部のためか、表面に浮上した変化は殆ど気づかず、8年前さながらの印象であった。ただ、重厚なドイツマルク紙幣が、銀メラ付きで明るい色彩に変わったこと、ミュンヘン空港が幾多の問題を孕みながらも移転を完了したこと、Volksschule が変化しつつあること（娘が当時通学した小学校を訪れた折、近所の方が私に話しかけ、同校の学童の質の低下を嘆いていた）、バイエルン州独特の突慳貪さの変質が伺われたこと（Lehnbachhaus [近代美術館] で鑑賞中、奇しくもテレビ向け「ドッキリカメラ」(caution camera) の犠牲者になってしまった）、医薬品創出が困難になったこと（医薬品開発での厳しい臨床試験、承認の難しさを私の昔のボスは零していた）等々

が短い滞在期間中に見出された8年前とは質を異にした点と言える。

街角の到る所に見受けられる、レフォルムハウスやマルクトには、“Tee Drogen” の陳列コーナーが華やかで、量的にも豊富であり、ドイツ人の自然指向、オルタナティブ運動の躍動が感じられる。日本で生薬学に籍をおき、多少なりとも漢方に興味を持つ者として、ドイツ伝統医学ホメオパシー療法を扱う薬局の多さには瞠目する。そして、ホメオパシーのPotenzierung (稀釈) の一例をとっても、漢方処方の煎じ後の濃度と共通するところがあり、現代の発達したと言われる科学の粋を以っても解明できない部分が世の東西に存することを痛感した。更には、今日の化学の隆盛が今回訪れた医薬史蹟にみる先人達の知恵と努力で構築されたものであること、日々の研究で見出される新知見も明日は既成事実となって多くは流れ去っていくことを実感足らしめる十分な旅であったと思っている。

日本薬史学会 総会等報告

1993 (平成5) 年4月17日 (土) 12時30分より評議員会開催 (東大医学部図書館地下食堂, 25名出席), この一年間の活動および次年度計画の大綱につき話し合われた。

13時30分より薬学部3階記念講堂において総会, 14時より、総会講演として、東京大学先端科学技術研究センター長の村上陽一郎教授より『科学史研究のあり方について』と題するお話しがあった。

講演終了後、再び医学部図書館地下食堂に移って、有志による懇親会が開かれた。

総会で討議された事項は別項の通りであるが、会則の一部改訂と役員人事について下記の如く議決された。

〔会則改訂〕

①会の英語名称の変更

Japanese Society of History of Pharmacy



Japanese Society for History of Pharmacy

②会費未納会員の取扱

一定期間後に警告の後、退会扱いとする。

〔役員人事(中間)〕

〈幹事〉 長沢 元夫 → 山川 浩司

大槻貞一郎 → (欠員)

〈監事〉 田辺 普 水野 睦郎

日本薬史学会

平成4 (1992) 年度活動概要

◎平成4 (1992) 年4月18日, 総会 (東京大学薬学部記念講堂);

総会講演; 石田純郎氏 (公立新見女子短大教授
・前ライデン大学客員教授)

「ヨーロッパ医薬史蹟散歩-日本とゆかりのある史蹟を中心に」

◎機関誌紙の発行

薬史学雑誌・第27巻; No.1 (6月30日), No.2 (12月30日)

薬史学会通信; No.15 (6月), No.16 (11月),

No.17 (平成5年2月)

◎「ヨーロッパ医薬史蹟を訪ねる旅(第1回)」

1992年5月23日～31日, 参加者16名

◎講演(集談)会

平成4年11月28日, 昭和大学医学部(東京都品川区)

フォーラム; ロンドン・パリの医薬史蹟を訪ねる旅 報告会

司会; 山川浩司氏(東京理大・薬学部)

平成5年1月19日, 大阪薬業クラブ(大阪市

中央区)

芝 哲夫氏(大阪大学名誉教授); 舎密局
について

渡辺 武氏(大阪城天主閣主任); 道修町
古文書の調査について

◎日本薬学会史年表作成への支援

日本薬学会が1980(昭和55)年に発行した,
“日本薬学会百年史年表”の継続編集事業に
支援参加して, 1980～1985年の分を「フェ
ルマシア」第29巻, 第1号(1993)に掲載。

平成4(1992)年度 決算

(単位 円)

〔収入の部〕	'92年度予算	'92年度決算	増減△
前年度繰越	3,101,333	3,101,333	
賛助会費	1,020,000	810,000	210,000△
一般会費	1,200,000	1,982,000	782,000
学生会費	10,000	1,000	9,000△
外国会費	20,000	0	20,000△
投稿料	500,000	33,835	466,165△
広告料	80,000	0	80,000△
雑誌販売	10,000	6,000	4,000△
雑費	10,000	10,296	296
利子	5,000	12,333	7,333
寄付	0	0	0
合計	5,956,333	5,956,797	464

〔支出の部〕	'92年度予算	'92年度決算	増減△
機関誌紙発行費	2,320,000	2,013,776	306,224△
編集費	120,000	0	120,000△
印刷費	2,050,000	1,921,386	128,614△
発送費	150,000	92,390	57,610△
事業費	950,000	282,477	667,523△
総会運営費	50,000	26,230	23,770△
講演会開催費	100,000	80,215	19,785△
文庫運営費	50,000	0	50,000△
西部支部費	50,000	50,000	0
予備費	200,000	8,328	191,672△
記念行事企画・運営費	150,000	111,704	38,296△
日本医薬品産業発展史編集費	150,000	6,000	144,000△
印刷補助費	200,000	0	200,000△
管理・運営費	490,000	336,376	153,624△
事務委託費	120,000	147,185	27,185
名簿管理費	50,000	0	50,000△
幹事会運営費	100,000	90,000	10,000△
通信費	100,000	35,845	64,155△
事務用品費	50,000	31,763	18,237△
入送金手数料	20,000	23,301	3,301
雑費	50,000	8,282	41,718△
合計	3,760,000	2,632,629	1,127,371
次年度繰越額	2,196,333	3,324,168	1,127,835